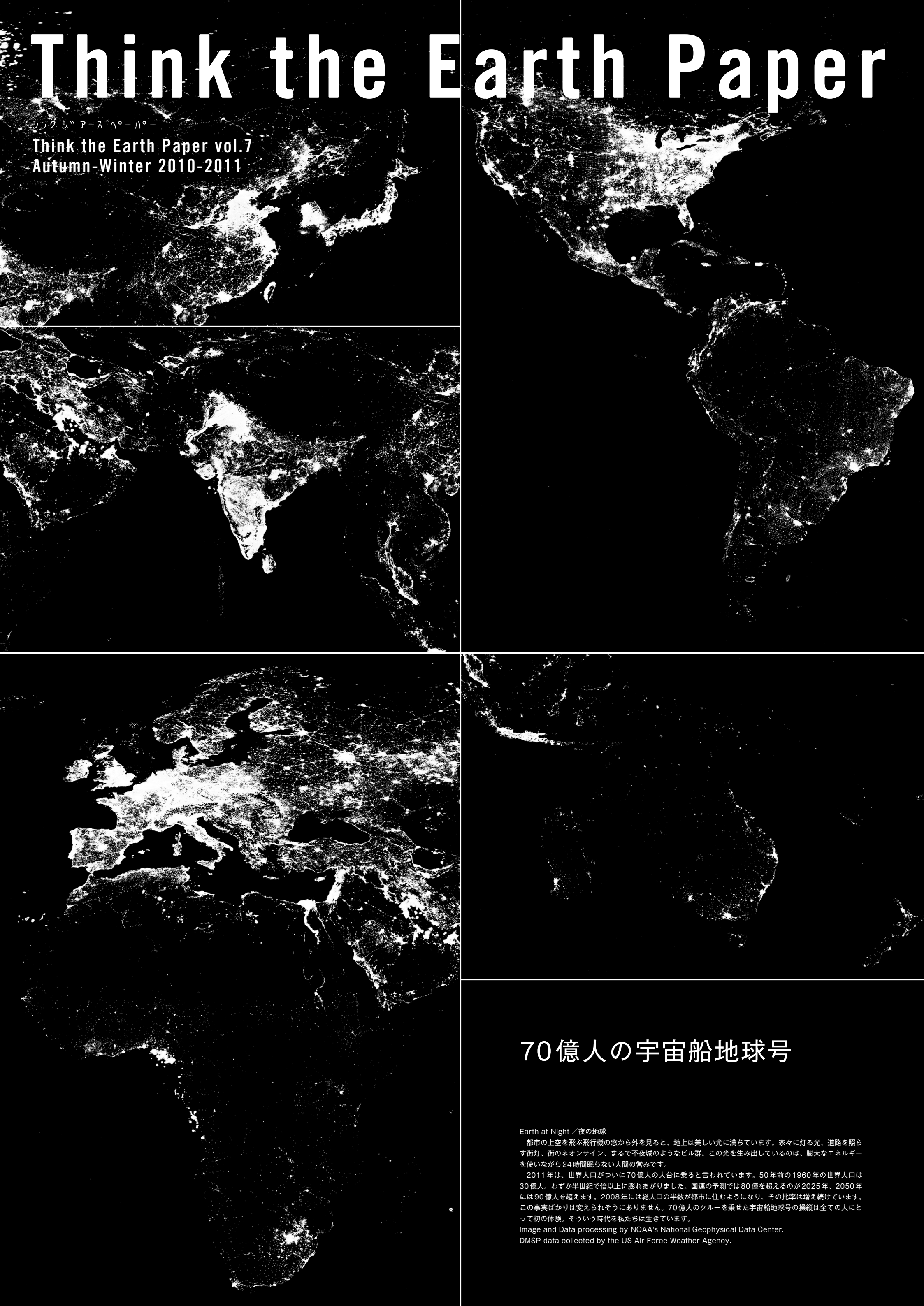
Think the Earth Paper

シンク ジ アース ペーパー

Think the Earth Paper vol.7
Autumn-Winter 2010-2011



70億人の宇宙船地球号

Earth at Night ／夜の地球

都市の上空を飛ぶ飛行機の窓から外を見ると、地上は美しい光に満ちています。家々に灯る光、道路を照らす街灯、街のネオンサイン、まるで不夜城のようなビル群。この光を生み出しているのは、膨大なエネルギーを使いながら24時間眠らない人間の営みです。

2011年は、世界人口がついに70億人の大台に乗ると言われています。50年前の1960年の世界人口は30億人。わずか半世紀で倍以上に膨れあがりました。国連の予測では80億を超えるのが2025年、2050年には90億人を超えます。2008年には総人口の半数が都市に住むようになり、その比率は増え続けています。この事実ばかりは変えられそうにありません。70億人のクルーを乗せた宇宙船地球号の操縦は全ての人にとって初の体験。そういう時代を私たちは生きています。

Image and Data processing by NOAA's National Geophysical Data Center.
DMSP data collected by the US Air Force Weather Agency.

テッラ・マードレ＝母なる大地から始まる新しい世界の動き

―スローフードの国際イベントを訪れて@イタリア・トリノ

2010年10月、イタリアのトリノ市のリンゴット（フィアットの工場跡）を会場に、国際スローフード協会が主催する国際イベント「テッラ・マードレ」が開催されました。テッラ・マードレとは、イタリア語で「母なる大地」を意味する言葉で、イベントには食の生産者（農業、酪農、漁業など）、料理人、研究者、学生、音楽家など6400人を超える人々が世界中から参加。食の生産者同士の世界的なネットワーク形成に貢献すると同時に、食の問題を越え、根底から「世界のパラダイムを変革する新しい動き」を人々がありありと感受できるエキサイティングな場ともなっていました。

取材・執筆・写真◉多木陽介

テッラ・マードレ開会！

2004年の第1回目から隔年で行われてきたテッラ・マードレは今回で4回目。2010年10月21日から25日の5日間、フードフェア「サローネ・デル・グスト」に併設される形で開催されました。約7000人の人々を収容するために用意された開会式会場は、2006年の冬季オリンピックの際に建築家、磯崎新が設計したオリンピックパレス。まず、マケドニアの民族舞踊グループ、アクード・ミルチェ・アツィエヴの大地の鼓動のような力強いダンスで幕を開け、少年少女のオーケストラとコーラスの演奏に乗って、世界 160 ヶ国の代表の旗手たちが大陸ごとに分かれて入場するという、まるでオリンピックの開会式のような形式で始められました。この冒頭の若々しい音楽のエネルギーは、テッラ・マードレが如何に未来の世代に大きな期待を託しているかを象徴的に表現しつつ、言語や文化の障壁を越えて観衆を感動させる見事な演出だったと言えるでしょう。

先住民族も主役

トリノ市長、ピエモンテ州知事代理らの挨拶があった後、エチオピアのガモ族、ブラジルのインディオスのグアラニ族、カムチャッカのイテルメニ族、北欧のサミ族、オーストラリアのアボリジニ族と、五大陸の先住民族の代表がそれぞれの言語で挨拶に立ちました。

近代化とグローバリゼーションの進む中で生命と文化の存続を厳しく脅かされながらも、大地と深く結びつき、環境と見事に適応した伝統文化の中で生き延びる彼らのメッセージは、他の何よりもテッラ・マードレ、そして現在のスローフード運動の主旨を的確に代弁する言葉でした。

食とワインのジャーナリストとして70年代より左翼系の新聞雑誌で活躍していたカルロ・ペトリーニを中心に、80年代後半にイタリアで生まれたスローフード運動は、元々ファーストフードに対抗し食品の品質を守るためのものでした。今や会員10万人以上の世界的規模の運動に発展し、最近は完全にエコロジー思想を吸収して自らの運動を「エコガストロノミー」と定義しています。こうして食品とともに「生物多様性」を重視する同運動は、それと密着した「文化の多様性」にも着目し、前回の第3回テッラ・マードレでは民族音楽を取り上げました。今回は先住民族の土着言語の重要性、それと結びついた口承文化、記憶などもテーマに選ばれ、会期中いくつもの講演や討論会が行われました。

未来への航路を知る船頭たち

開会式の締めくくりには、まるで映画スターの登場を待ち構えるような数のフォトグラファーたちが押し寄せる中で、スローフード協会会長のカルロ・ペトリーニが演壇に立ちました。その彼がまず強調したのは、先住民族の代表者たちの言葉の中にあった教え、「伝統的な知を保護することこそが、我々が生きて行くために必要不可欠な手段を与えてくれる」ということでした。

「伝統的な知の保持者としては、4つのカテゴリーがあります。それは、先住民、農民、女性、そしてお年寄りです。彼らに耳を貸すだけでなく、現代世界の危機を乗り切るためには、彼らにこそ第一線で活躍してもらう必要があります。しかし現状はほど遠く、政治はこれらのカテゴリーを考慮の対象にさえしません。メディアも関心を向けません。熱狂し、利潤にばかり気を取られた人類は、金融、社会、環境、全ての領域で舵を失いひたすら漂流するばかりです。（中略）しかし、人類は文明崩壊の深淵の際まで辿り着いたら、後退を余儀なくされるでしょう。後退することになったら、最後方にいる先住民、女性、農民、お年寄りたちが先頭に立って我々に正しい道を教えてくれることに気づくでしょう」。

我々を未来に導く船頭になるのは彼らなのです。

女性の問題に関しては、世界的な環境と食糧の問題に理論、実践、両面で取り組むインドの環境運動家、ヴァンダナ・シヴァにもインタビューしました。農村における女性の役割についても数多く発言をしているシヴァ女史は、筆者の質問に答えて、女性原理とエコシステムの働きが非常に近いことなどをあげ、サステイナブルな社会作りにおける女性の役割の重要さを強調していました。

科学と伝統の知の和解と協調

これまでヴァンダナ・シヴァらと非常に近い視点で「近代的な工業化された農業」と「グローバルなアグリビジネス」を批判することに焦点を当て、特に「伝統的な農耕の知や文化の重要さ」を強調して来たスローフード運動ですが、今回のペトリーニの論調は少し違いました。伝統文化と近代科学のどちらも単独で完璧な真理を握っている訳ではないこと、その両者の和解と協調が未来を切り開くためには必須であることを繰り返し強調したのです。

3日目の質問会でのこと。ペトリーニはこう言いました。「西欧近代文明を支えてきた科学だけでなく、現代のテクノロジーやインターネットとお年寄りや先住民、女性たちの伝統的な知を対話させることで、強い爆発力のある混合物が生まれるのです。これこそ真の変革の力となるものです」。

そこで筆者は、この2つの「知」の間の対話、つまり和解と協調を具体的にはどういう形で実践するつもりか、と質問。その答えとして、彼はひとつの例を挙げました。

「テッラ・マードレには世界中の大学約400校から教授たちが来ていますが、彼らにはひとつ責任があります。自国に戻った時に農民と仕事をするという責任です。こうして既に農民が大学へ行って、教師として教えるようになったという素晴らしい事例も出ています」。

これまでの社会ではかけ離れていた大学と農民の組み合わせに新しい知の誕生が託されているのです。

若い世代への期待

もうひとつ、開会式でペトリーニが強調したポイントは、若者こそがその和解の実現者だということでした。

「若い皆さんには大きなチャンスが与えられているんです。皆さんは、科学及び現代のテクノロジーと伝統的な知を協調させるという義務を担った世代です。皆さんは実に面白い時代を生きることになるのです。自信を持って下さい。素晴らしい挑戦的課題が待っています。（中略）科学及び現代のテクノロジーと伝統的な知をひとつにしようとすることは、これから皆さんが立ち向かうべき最も素晴らしい課題です。若い皆さん、この宿命をしっかりと自分のものにして下さい」。

世界的に未来の見えない不安に包まれた現代の若い世代に対して、これほど力強い期待を持って未来を託してくれる彼の言葉は、会場の若者たちの心を打ちました。ペトリーニはさらに、フランスの哲学者エドガー・モランの言葉、「全てやり直さなくてはならないけれど、すべてのやり直しは、もう始まっているのです」を引用しながら、極めて困難な時代ながら、もう正しい道は見えていると示唆しました。

「君たちこそがこの変化の主役なんです。君たちが、社会を変身させるんです。醜い芋虫がさなぎになり、蝶になるように。これが君たちの使命なのです」。こう言われて心躍らない若者はいなかったでしょう。

ジェネレーションT

イタリアでは35歳以下で農業を選んでいる若者が約10万人います。国内の農民の総人口から見るとまだわずか7%で

❶各民族の旗手たちが舞台上に集まる代表者席。❷開会式場のオリンピック・パレス「パライソザキ」に向かう参加者たち。❸開会式の演壇に立つスローフード協会会長カルロ・ペトリーニ。❹ウガンダの農民の女性は、食科学大学の学生たちに自らの土地の作物、農耕技術などを説明。アフリカの農耕は決して貧しいものではなく、多様な作物とサステイナブルな知恵にも溢れている。彼ら自身のこの意識革命がアフリカを救う鍵。❺「ジェネレーションT」についての討論会。❻スローフードが創設した食科学大学のブース。食に関する知識と実践を積む学生たちこそ、伝統と科学を結びつける未来の立役者。❼食の知識を子供たちがゲームを通して身につけるコーナー。変革の土壌はまず子供の教育から。❽南北アメリカ大陸の先住民代表として、ブラジル、グアラニ族の代表アドルフォ・ティモティオがスピーチ。背後には世界160ヶ国の代表たちが座る。❾インドの環境運動家、ヴァンダナ・シヴァ。❿参加者と彼らのホームステイ先となる地元のファミリー。このイベントは多くのボランティアに支えられている。

すが、コンピューターとインターネットを駆使して消費者と直接つながり、技術革新をしながら、環境を大事に安全で美味しい食品を作る彼らは、その地位をますます重要なものにしつつあります。売り上げでも＋75%と平均を大きく上回っています。また最近、ペトリーニがアメリカの一流大学数校で「将来自分の人生の目的として農業に従事しようと思っている人はいますか?」という質問をしたら、300～400人の参加者の中で、手を挙げる学生が毎回25～30人はいたそうです。世界のパラダイムが確かに変わりつつあるのが実感される数字です。

スローフードでは、農業に従事する若い世代を「ジェネレーションT」(Terra［大地］のT）と呼びます。その彼らの活躍を通して、「お百姓さん」が「時代遅れの貧しい職業」ではなく、貴重な伝統の知恵と新しい科学技術やパラダイムをミックスして世界を変革できる、未来にとって最も重要な職能のひとつだということを訴えています。

今回のイベント中にもペトリーニと世界の若い農民が出会う場として「ジェネレーションT」と題された討論会が催されました。参加者のひとり、ブラジルのジャンダイーラで養蜂を営むフランシスコ・カベコは2008年のテッラ・マードレで大いに勇気づけられ、帰国後6ヶ月を費やして地元の若者たちと討論。ジャンダイーラ蜂のサステイナブルな飼い方を皆に伝え、化学製品に頼っていた親の世代に有害な農法を改めさせていると言います。また、一般生活者が「消費者」としてではなく、多様な形でより積極的に食品の生産に参加する「共同生産者」である、という概念を地元にも広めたところ、人々の食品生産への意識が高まったそうです。ただ自分が生きて行くために食品を作るのではなく、農業、及び食品生産、消費について人々の意識を変革していくのも、一層複合的な役割を担う「ジェネレーションT」に与えられた重要な課題のひとつだということを教えてくれる話でした。

先端の知の集結

世界中の若者たちが会場に溢れているのもテッラ・マードレの特徴ですが、カルロ・ペトリーニやヴァンダナ・シヴァはもちろん、環境問題に敏感な経済学者のジェレミー・リフキン（米）、「脱成長」の理論家セルジュ・ラトゥーシュ（仏）、食糧問題に精通した経済学者ライ・パテル（英）など、先進国の作り上げた市場経済と文明が完全に破綻していることを正確に把握し、新たなパラダイムを提示してくれる世界一流の識者たちが多数集結していたのも印象的でした。若者の中に生まれつつある自発的な新しいエネルギーとともに、彼らの言葉を通して、参加者たちは、新しい世界が動き出していることを強く実感したはずです。

同時多発的に開催される講演/討論会のうち特に興味を惹かれたのは「スモール・イズ・ビューティフル1973－2010－　現在の危機的状況を読むためのエルンスト・F・シューマッハーの理論」でした。パネラーはイタリアで最近注目の経済学者ロレッタ・ナポレオーニと「スロー・マネー」の発案者ウッディー・タッシュ（米）で、二人ともシューマッハーの著作が今なお、いや今になってますます強いインパクトを持って読まれるべき本であることを訴えていました。「60年代に地球を宇宙から撮った写真を観て、地球が（宇宙からしてみれば）小さな限りある球体に過ぎないと分かった時に、なぜ人々はやり方を変えなかったのだろうか?」とタッシュは自問します。「成長に限界がある」ことに気づいていながら、なぜ方向転換しなかったのか。その後の経済成長は、先進国の人々をより裕福にはしましたが、余暇は少しも増えず、消費が増すことは幸せの増長に繋がりませんでした。にも拘らず、シューマッハーの危惧した通り、経済は巨大化と倫理の廃棄を押し進め、現在に至っています。

さらに、同講演では、『スモール・イズ・ビューティフル』とスローフードに刺激され、ウッディー・タッシュが創始したスロー・マネーについても議論されました。スロー・マネーとは、投資家が自分の住んでいる場所から比較的近くにある小規模の食品生産者（農業、畜産業、漁業、加工業など）に投資するもので、お金と大地をつないで投資される資金が目に見える形で利用され、成果を生むシステムです。これは、我々の預金が世界の全く知らない場所で、全く知りようもない目的、もしかしたら戦争に運用されている現在の金融業のあり方の対極を実現するもの。資金運用の倫理性はもちろん、投資家にとっての安全度、地域への利益の還元度から言っても理想的です。そして何より、地域の経済に住民が直接参加し、地域レベルで新しい経済のあり方を作る方法として、とても期待できるものです。先の「ジェネレーションT」の講演会でペトリーニも、「私のわずかな預金も農民にあげるつもりです。銀行なんかよりずっと彼らの方があてになります」と語り、スロー・マネーの重要さを訴えていました。

テッラ・マードレの未来像

農作業と深く結びついた民族音楽、原住民の言語など、食に結びついた文化の多様な側面も扱うようになったテッラ・マードレですが、今後はどうなっていくのでしょうか。

ヴァンダナ・シヴァは「イベントが多様性を持ってきたが、やはりバックボーンは食の生産者のコミュニティだから、その意義をさらに強化する必要がある」と主張します。ペトリーニ自身は、これをトリノのイベントとしてだけ考えないことの重要さを強調しました。「世界中でテッラ・マードレを行うこと。そのことで、農民ばかりだけでなく、大学等も含めてホリスティックな形で世界中にネットワークが広まり、根付いていくことが何より重要である」と。

このネットワークの将来のあり方については、スローフード運動の実働部隊と言える「生物多様性のためのスローフード基金」会長、ピエロ・サルドがさらに詳しく語ってくれました。彼は、イベントとしてのテッラ・マードレは4、5年に1回、オリンピックのようにあればいいと言います。

「より重要なことは、テッラ・マードレが多くのプロジェクトに分かれ、各地の食のコミュニティがより自発的、自律的に活動することです。その一つひとつにおいて、より裕福な北側の食のコミュニティが数年間責任もって、苦難にある南側の食のコミュニティを支援しながら、互いに学び合い、ともに共同作業するのが望ましいでしょう。テッラ・マードレの将来の姿はこうあるべきだと思います。資金提供だけではなく、北側が自分たちの経験と技術にネットワーク内の大学、技術者、若者、ボランティアたちを加えれば、もう、すごいパワーになりますよ」。

毎年12月10日は世界中でテッラ・マードレを祝うテッラ・マードレ・デイ。現在食の生産に直接関わっていない人もその日には、なるべく地元産の食品を食べ、「母なる大地」に感謝の意を捧げることで、この大きな運動に参加してみてはいかがでしょう。大きなネットワークにつながれた今、一人ひとりがより自律性をもって自らの食生活を変革していくこと、それが何よりも重要になってきているのです。

多木陽介●演出家、アーティスト、批評家。1988年に渡伊、現在ローマ在住。演劇活動や写真を中心にした展覧会を各地で展開。現在は多様な次元の環境（自然環境、社会環境、個人の精神環境）におけるエコロジーを進める人々を扱った研究を行ないながら、芸術、批評双方で生命を全ての中心においた人間の活動の哲学を探究している。

From Tokyo

銀座のミツバチが紡ぐ都会の里山物語

銀座でハチミツが採れる、という話を聞いたことがある人も多いのではないでしょうか。2006年に「銀座ミツバチプロジェクト」がスタートしたのをきっかけに、今この街は「人と人がつながる小さな里山」へ変身しようとしています。ミツバチが生きやすい街を作ろうと屋上緑化を進めたり、採れたハチミツを使い老舗のお店が「地産地消」を実現したり。ミツバチに引き寄せられるように人々が集い、新しいアイデアが次々と生まれています。街の発展の方法を模索していた銀座が、ミツバチによって思いがけず「都市と環境の共生」という答えを見つけたとも言えそうです。

取材・執筆◉**小泉淳子**　写真◉**上田壮一**（Think the Earthプロジェクト）

ミツバチとの対面

銀座3丁目にある銀座紙パルプ会館を訪ねたのは、2010年9月上旬の暑い日。11階建てのこのビルの屋上に、銀座のミツバチたちが住んでいるのです。ここには西洋ミツバチと日本ミツバチの巣箱が設置されていて、毎日数十万のミツバチが飛び立ち、銀座周辺の木々や植物から蜜を集めてきます。

この日は、秋から冬を迎えるための準備と採蜜が行われました。全身を白い防護服で覆い、頭にネットをかぶり、準備は完了。飛び交うミツバチに最初は近寄るのをためらいましたが、一度近寄ってみると、怯える必要などないことがわかります。同じ空間を共有している、そんな感覚でしょうか。

作業をするときは、素手が基本。手袋を使うと扱いがぞんざいになり、ミツバチの性格が荒くなるからだそうです。多くの人が行き交う都会の養蜂ならではの配慮は欠かせません。燻煙器によって煙を出すのも、ミツバチを落ち着かせる方法のひとつ。慣れてくれば手の平に乗せても平気になります。

採蜜の手順はこうです。ハチを巣枠から移動させ、巣枠についた蜜蝋をそぎ落とします（蜜蝋はろうそくなどになります）。これを遠心分離機に取りつけ、回転させながらハチミツを絞り、濾過させるとハチミツのできあがり。採蜜のピークシーズンは過ぎていますが、この日だけで約10キロのハチミツが採れました。銀座は夏でも蜜枯れしないため、9月になっても一部でハチミツが採れるのだとか。遠心分離機にかける前の蜜をなめてみると、ほんのり優しい味がしました。

大人の遊び心から始まった

銀座にミツバチプロジェクトが誕生したのは2006年。ひとりの養蜂家との出会いがきっかけでした。発起人となったのは、貸し会議室を営む紙パルプ会館常務の田中淳夫さんと、有機農産物の流通を手掛けるアグリクリエイトの高安和夫さん。岩手県の養蜂家、藤原誠太さんが銀座で養蜂ができる場所を探していることを知った田中さんは、紙パルプ会館の屋上を貸してもいい、と申し出ました。ところが、藤原さんは「面積が小さすぎて養蜂業としては無理。教えてあげるから、あなたたちでやってください」と言ったのです。

田中さんも高安さんも最初は驚きますが、「銀座にミツバチがいたら面白いじゃないか」と、この話に乗ることにしました。藤原さんは既に永田町の社民党ビル屋上でミツバチを飼っており、都会のビル屋上での養蜂に実績がありました。「皇居周辺にユリノキがあるのを発見し、この周辺で採れたハチミツは最高のものになると確信していた」と、藤原さんは言います。

ここがミツバチの住まい。西洋ミツバチの巣箱が4つ。日本ミツバチは別の場所にいる。

「銀座でミツバチを飼おうなんて、アバンギャルドな存在だと思われたでしょうね」と田中さんは笑います。でも、銀座の懐の深さがそれを許容してくれたと考えています。もちろん始める前には各方面に相談に行き、ビルの全テナントにも了解を得るなど入念に準備しましたが、ハチが人を刺すのではないかと心配する声もあったそうです。それでも「大人の遊び」に賛同してくれる人がたくさん現れたのですから。

ミツバチの目線に立った街づくり

こうして始まった「銀ぱち」のハチミツの収穫量は初年度が150キロ、07年が290キロ、08年には440キロ、10年は7月末現在で昨年同様の800キロを超えました。現在の賛助会員は135名に上ります。

もっとも世界を見渡せば、都市での養蜂は特別なことではありません。パリでは既に何年も前から養蜂が盛んに行われています。オペラ座や、1900年に開催された万博の会場となったグラン・パレの屋上で採取されるハチミツは、パリ名物のひとつにさえなっています。通りにはアカシアやライムなどの木々が並び、アパルトマンのバルコニーにはさまざまな花の鉢植え、近くにはチュイルリー庭園があるなど、パリはミツバチにとっては最高の環境なのです。花の種類が多いため、多様な味が楽しめるそうです。

ニューヨークでも2010年3月、禁止されていた市内での養蜂が解禁になりました。ロンドンでも市民のための養蜂講座が人気を呼んでいます。都会とミツバチの関係は相性がいいのです。近くに皇居や日比谷公園、浜離宮など豊富な蜜源がある銀座も、ミツバチにとっては住みやすい環境だったのでしょう。

国際養蜂協会連合の顧問で、東京・世田谷の自宅で30年前から養蜂を行ってきた渡辺英男さんは、「ミツバチが都市を救う」と言います。ミツバチは緑がないと生きていけない動物であり、農薬にとても弱い生き物です。とりわけネオニコチノイド系の農薬には弱いとされ、大量死の一因ではないかとも指摘されています。地方では効率的な農業のために農薬が大量に散布されたり、スギやヒノキなど花をつけない木々の植林が盛んに行われたために蜜源が減少したりと、ミツバチが生きるには過酷な環境となってしまいました。地球環境の将来を考えるときには、ミツバチが住める環境を整えることが大切だというわけです。

渡辺さんはミツバチには4つの役割があると考えています。

都会と自然をつなぐハチミツ。写真提供／銀座ミツバチプロジェクト

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトの田中淳夫さん。

ミツバチにとっては、田舎よりも都会の方が住みやすい？

燻煙器で新聞紙を燃やして煙を出す。煙がミツバチを落ち着かせるという。

慣れてくれば手の平に乗せるのも平気に。触ると温かい。

ミツバチの様子を確認し、ハチを移動させた後の巣板。蜜がたっぷり詰まっている。

蜜の詰まった巣板を遠心分離機にかけてハチミツを抽出する。

黄金色に輝く、フレッシュな銀座産ハチミツの出来上がり。

1つめは「健康と暮らし」。体にいいハチミツやプロポリス、ロイヤルゼリーなどをもたらす役割。2つめは「花粉交配（ポリネーション）」。花から花へ花粉を運び受粉を助ける。植物が豊かな実をつけるのに貢献する大切な役割です。3つめは「環境改善」。ミツバチが生きるためにはいい空気やいい水が必要。ミツバチが住みやすい環境はすなわち人間にとってもいい環境になるのです。4つめが「人間社会の改善」です。ポリネーターとして人と人を結びつけ、自然と共生することの大切さ、人々がひとつになることの大切さをミツバチが教えてくれると言います。

銀ぱちの田中さんも、ミツバチを飼い始めてから、街を見る「視点」が変わったそうです。近隣の樹木が受粉し、実をつけて、その実を鳥が食べる――そんな自然の営みに感動し、小さな生き物にやさしい街づくりへ動き出します。自分たちがポリネーターとなって、人と人を結びつけようと、2つの活動（「ビーガーデン・プロジェクト」と「ファームエイド」）を始めました。

ビーガーデンの広まり

「ビーガーデン・プロジェクト」は、ミツバチが快適に暮らせるよう、東京に緑を増やそうと呼びかけるもの。呼びかけに応じ、これまで松屋銀座、銀座ブロッサム、マロニエゲートなどのビルの屋上に計1000平方メートルを超える農園や花壇が誕生しました。先頃新装オープンした三越にも芝生を敷き詰めたテラスや農園が生まれています。

屋上庭園のなかでも異彩を放つのが白鶴会館です。ここでは日本酒の原料になる酒米を育てています。屋上のドアを開けると広がる「水田」は圧巻。黄金に輝く稲穂が風に揺れている様を眺めていると、都会にいることを忘れてしまいそうなほどです。もちろん本物の水田には及ばないでしょうが、スズメやトンボも飛んでくるし、いろいろな虫も現れます。桜の木も植えられているため、紙パルプ会館の屋上からミツバチも飛んできます。緑があればそこに動物がやってくる――まさにそれが実感できる空間です。

兵庫県神戸市に本社を置く白鶴酒造が銀座で酒米作りを始めたのは07年。08年には70平方メートルで15キロ弱、09年は45キロの酒米を収穫しました。収穫したお米を使った日本酒は同ビル内で行われるセミナーで試飲ができるそうです。今は一部で地元の小学生が植えたコシヒカリも育てており、10月には収穫を行います。本物の農家を訪ねる農業体験ツアーが人気ですが、それを身近で体験できるのですからなんとも贅沢な話です。

日本酒の消費量が落ちるなか、「銀座」というブランドの力でお酒を作ってPRをしたいというのが最初の発想でした。ところが、予想を超えた結びつきが生まれました。収穫のときには、銀ぱちのスタッフはもちろん、クラブのママやバーデンダーなど、さまざまな人が集まるそうです。これもまた、ミツバチが人と人を結ぶポリネーターとしての役割を果たした結果といえそうです。銀座の田んぼが気に入ったママさんたちの間には「緑化部」も生まれたのだとか。畑で生姜やハーブを育てて自分たちの店で出したい、などママさんたちの夢は膨らんでいます。

田んぼの責任者である白鶴酒造の小田朝水（あさみ）次長は、米の収穫が終わったら小麦を栽培して二毛作を実現したいと考えています（2009年は7キロの小麦を収穫）。「銀座産の小麦とハチミツでコラボレートできたら面白い。屋上を通じて何かできないかと常に考えている」と言います。「田んぼができたことで出会いが増え、人生の財産になった」という気持ちがそれを後押しします。

とはいえミツバチの世話も、米の栽培も、一朝一夕ではできません。週末だからといって世話を休むわけにはいきませんし、相応の手間と忍耐と覚悟が必要です。日本全国の都市でミツバチを飼う動きが広がっていますが、大事なのは継続することだと銀ぱちの田中さんは言います。始めたのはいいけれど続かない例も聞くそうです。

銀座の取り組みが成功したのは、街全体を巻き込む強い意志があったからこそ。田中さんや高安さんがプロジェクトを始める以前から銀座はどうあるべきかといった議論に参加し、人と人のつながりを大事にしていたから大きなうねりが生まれたのだと、今回の取材を通じてよく分かりました。「ハチミツを目的にしてしまうと、継続するのは難しい。蜜が採れるときも採れないときもあります。蜜源がなければ花を植えるよう、みんなで努力をしなければいけない。ミツバチを地域のなかでどう受け止め、小さな命をどう広げていくかを考えないと、根づかない」（田中さん）

生産者と都市を結ぶ試み

2つめの活動が、08年より行っている「ファームエイド銀座」です。「森、里、街、そして海をつなぐサスティナブルネットワークフェスタ」を掲げ、地方の生産者と都会を結びつけるイベントを定期的に開催しています。9月に行われたファームエイドでは、新潟の酒米の稲架（はさ）掛け（刈った稲を天日のもとでゆっくり乾燥させる方法）の稲架も登場しました。思いもかけない話が次から次へと舞い込むんですよ、と田中さんは言いながら、その表情はとても楽しそう。

銀座産のハチミツは、これまでさまざまな形で商品化されてきましたが、こだわったのは「地産地消」。銀座の職人の技で作って銀座で売りたい。その願いが実って、ホテル西洋銀座でマカロンになり、文明堂でハニーカステラになり、三笠会館のbar 5517ではカクテルになりました。社会福祉事業を営むスワンは、知的障害者が働くベーカリーでラスクなどを販売しています。バーやクラブの連合会「銀座社交料飲協会」は85周年を記念して、オリジナルカクテル「ハニーハイボール」を考案。1杯飲むごとに小額ですが銀座の緑化運動に寄付される仕組みです。

ミツバチの訪れとともに、この街にはさまざまな物語が生まれましたが、すべてを紹介することはとてもできそうにありません。ただひとつ確かなのは、小さな生き物へのやさしい眼差しが、都会に里山を作るのが夢ではないことを教えてくれたことです。建て替え中の歌舞伎座の屋上でも、養蜂が行われるようになるかもしれません。パリのオペラ座に対抗して歌舞伎座ハニーを売り出せば、話題になるでしょう。ビルが農場になり、壁面にびっしり野菜が実る日もいつか来るかもしれません。

銀ぱちは2010年3月、農業生産法人「株式会社銀座ミツバチ」を設立しました。これまでボランティアに頼っていたミツバチの世話人の生活基盤を作り、生産を拡大するためです。福島県の遊休農地を借りてジャガイモなどの栽培も始めました。「銀座のミツバチは、もしかすると人々を奥山へつなぐゲートウェイなのかもしれない」と、社長に就任した田中さんは言います。銀ぱちがこれからどこへ向かうのか、ますます目が離せそうにありません。

銀座ミツバチプロジェクト　http://www.gin-pachi.jp/

小泉淳子●編集者・記者。国際ニュース週刊誌で長年カルチャーやIT、教育などの取材を行う。現在は書籍の編集に携わる。地球をとりまく問題を多面的に発信していきたいと考えている。

いち早く屋上緑化に取り組んだ松屋銀座のビーガーデン。

松屋の屋上ではトマトやゴーヤなどの野菜を栽培。

白鶴会館の屋上のドアを開けると水田が広がっている。

ファームエイドでは新潟の蔵元の稲架掛けも登場。

Think Daily 地球ニュース

NPO/NGO活動コラム

COP10が終わっても、生物多様性の保全は終わらない

生物多様性の保全活動で大切にしていることは何か。15年以上前から現場の研究者を支えてきた国際NGO、アースウォッチ・ジャパンを訪ねた。

2010年の10月末、名古屋でCOP10が開かれた。メディアで「生物多様性」という言葉が毎日のように取り上げられ、多くの人が耳にしただろう。では、最近はどうか。会議が終わったこれからが大切だというのに、ニュースではほとんど話題にされなくなってしまった。アースウォッチ・ジャパンの小林俊介さんは「生物多様性の保全はただのブームで終わってほしくない」と語る。

アースウォッチ・ジャパン（以下、EWJ）は、研究者による野外調査に必要な資金と人材を支援するため、調査を手伝う一般市民をボランティアとして募集し、派遣している。国内のプロジェクトは16歳以上であれば誰でも参加可能。内容は「天然記念物ヤマネの生態調査」や「絶滅の危機に瀕している草原性チョウ類の生態調査」などさまざまだ。海外プロジェクトの参加者の75%は20～30代の女性。国内プロジェクトは若者からシニアまで、広い層が参加している。最近は特に若い人たちの中で意識が高まってきたことを感じているという。

EWJのプロジェクトは観光目的のエコツアーでは行けないところへ行けるという点も魅力のひとつになっている。

「たとえば、アフリカのエコツアーに参加すれば車の中から野生のキリンや象を見ることができるかもしれません。でも、EWJのプロジェクトでは、動物のフンや足跡を調査するために車から降りて歩く。こうした『体験』こそが人の意識を変えるんです」と小林さん。体験したことは一生忘れないからだ。

興味深いのは、EWJからの「べき論」的押し付けがないこと。「経験したことを普段の生活に活かすかどうかは参加者次第」と本人に任せている。中には何度も調査に参加したり、大学に入りなおしたりする人もいるが、プロジェクトでの経験を周りの人に伝え、広めていってくれることに意味があると考えている。これは1971年にアメリカでアースウォッチが設立された当時からの目的であり、人を派遣する上でのシステムは変わってもこのコンセプトは変わっていないという。小林さんは「人間が変われば環境も変わる」と語る。研究というとデータや数字ばかりに目がいってしまうものだと思っていたが、EWJでは野外調査の結果だけでなく一般の人との関わりを大切にしているというところが印象的だった。

特に今年は「生物多様性元年」と言われていることが影響したせいか、賛同してくれる企業も増えた。「企業が関心を持ってくれればその社員にも浸透し、そしてその友人へと広まっていく」と小林さん。名古屋議定書や愛知ターゲットも決まり、生物多様性の保全はこれからが本番。まずは野外に出て体験し、伝えることから始めてみてはどうだろうか。　（木村絵理）

写真上）「温暖化と沿岸生態系」調査プロジェクトで磯の生き物を調査するボランティアたち。写真下）「多摩川のカメ」調査プロジェクトではカメの捕獲網を設置。

特定非営利活動法人アースウォッチ・ジャパン
1971年にアメリカで設立された国際NGO。気候変動や野生生物・生態系など環境保全研究の野外調査を支援している。アースウォッチ・ジャパンは、この活動をアジアに広めるため1993年に発足、2003年より特定非営利活動法人。http://www.earthwatch.jp/

Biodiversity

UAEとモンゴルが人工巣でハヤブサ保護へ

アラブ首長国連邦（UAE）とモンゴルが2010年9月、野生のセーカーハヤブサを保護するためのプロジェクトに合意した。モンゴル中央部の草原に人工巣を5000個設置し、ハヤブサのヒナを増やすことを目的としている。ポールの先に取り付けられた金属の大きな缶の人工巣で、今後5年間にわたって科学者が経過を観察。モンゴル人スタッフにも給料を支払い、密猟を減らし、保護意識を高める動機づけになるよう期待されている。

国際野生動物保護の専門家は、モンゴルの人々の「単純に、自然のままにしておく」という仏教精神がハヤブサを繁殖させてきたと言うが、密猟者の出現によりその数は減少しつつある。密猟をなくす唯一の方法は取り締まりを行うことだが、野生動物取引の規制は国境という「抜け道」があるために難しく、パキスタンやアフガニスタン、カザフスタンなどでは国境をパトロールする余裕がないのが現状だ。そこで、プロジェクトの窓口であるアブダビ環境庁の支援が、モンゴルの農民や遊牧民が密猟者を報告する後押しになり、また今回の環境と野生動物についての合意が、両国間の社会・経済の相互交流へと広がっていくことが期待されている。鷹狩りに欠かせないセーカーハヤブサは、UAEにとっても重要な遺産であり、両国共通の遺産なのだ。

（高橋 彩）

Energy

世界で広がるソーラーバス

岡山県岡山市では、太陽電池を照明に利用した近未来型バス「SOLARVE（ソラビ）」が2010年9月から運行している。バスの屋根に取り付けられた太陽電池が発電。発光ダイオード（LED）の車内照明に利用され、日没後でも約9時間も連続点灯できるハイブリッドバスだ。市内の路線を1日4往復している。

太陽電池の活用はバス停でも広まっている。交通機関の機器などを手がける岐阜県本巣市の会社ではバス停用のソーラー式LED照明灯具を販売。従来の照明と異なりコストがかかる配線工事は不要。日没後に約8時間も点灯し、夜間の防犯や時刻表の確認など、バス停の利便性を大幅に向上させる。アメリカ・サンフランシスコ市では太陽電池を照明に活用したバス停に変え、発電した電力をバス停に設置しているWiFi無料サービスにも活用。さらに余った電力は市内のグリッド（送電線網）に戻され、無駄無く利用できる仕組みだ。

オーストラリア・アデレート市では動力を太陽光ですべてまかなっている、無料公共バス「アデレードコネクター・Tindo」が話題。すでに2007年から運行されており、7万キロワット／年間を発電、30トンの二酸化炭素削減が可能とのこと。多くの市民が利用する公共の交通機関。今後、電車や飛行機への太陽電池の取り組みにも期待したい。

（奥山 賢治）

Food

レンタル無料、牛が農地再生いたします

高齢化や過疎化の影響で、耕作放置されたままの畑、遊休農地が増えている。草木が生い茂った遊休農地を畑に戻そうとしても、手間もコストも時間もかかってしまうもの。そこで、山梨県の甲府市右左口（うばぐち）町と牧丘町北原とで始めたのが「レンタル牛」。放牧した牛に遊休農地の雑草を食べてもらい、畑へ再生してもらおうという取り組みだ。

レンタル牛による雑草処理手法はいたってシンプル。牛が逃げないように太陽光発電の電気牧柵を設置し、繁殖用の雌牛を放牧。4歳以上で、妊娠している雌牛は性格がおとなしいため、力の弱い女性にも扱いやすいとのこと。管理は定期的に牛の健康状態、水、食用塩の確認をするだけ。牛1頭の草食力は1日あたり約40キロ。えさ代をかけずに牛を飼育し、低コストで畑を蘇らせ、さらにイノシシやシカなどによる食害予防や里山保全も期待できる。山梨県ではレンタル牛を2010年度からの2年間、県のモデル事業として実施予定。この事業を展開させるべく、期間中は牛を無料でレンタルしており、13年には一般畜産農家の牛を貸し出す「レンタル牛バンク」の設置も計画している。

実はこのレンタル牛、島根県や山口県でも実施されており、今後、全国各地でレンタル牛が脚光を浴びることになりそうだ。

（奥山 賢治）

Art & Design

ヒントはクモの巣　鳥にやさしいガラス

ドスンと音がして、オフィスや家の窓ガラスをみると、ぶつかった鳥が地面に……。毎年たくさんの鳥が建物の窓ガラスによって命を落としたり傷ついたりしている。鳥には透明なガラスを認識するのが難しく、特に樹木が映り込んでいると、本当の樹木がそこにあると見間違い、衝突してしまうというのだという。そんな事態を防ごうと、ドイツのガラスメーカー、アーノルドガラス社が鳥にやさしい窓ガラス「オルニラクス」を発明した。

鳥に窓ガラスの存在を知らせるには、それが「障害物」だと分かる形で見えるようにすればいい。鳥はヒトには見えない紫外線を見ることができる。そしてクモの巣にかかる鳥がいないことからデザインのヒントを得て、「紫外線を反射する網状の模様」をガラスに施し、ヒトの目には透明でも、鳥の目にはしっかりと模様が映るように加工した。同社と共同開発を行ったドイツのマックスプランク鳥類研究所によると、効果は上々で、一般的な二重ガラスに比べ衝突する鳥が最大75%減るとの実験結果が出ている。

この斬新なアイディアは、世界のデザイン賞の中でも権威ある賞のひとつ、レッドドット・デザイン賞で、2010年の建築・インテリアデザイン部門、最優秀賞を受賞。自然との調和を生み出すデザインとして称賛された。

（高田 久代）

Information

デジタルプラネタリウムで上映できる大型映像作品、ついに完成！
Think the Earthプロジェクトの活動いろいろ、最新情報。

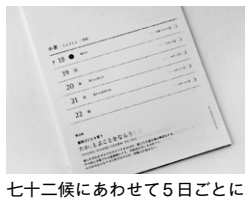
01 国際生物多様性年の2010年に大型映像作品「いきものがたり」完成！

2010年10月に名古屋でCOP10が行われ、難産の末とはいえ「名古屋議定書」と「愛知ターゲット」が採択されました。特に「愛知ターゲット」には、少なくとも2020年までに全ての人が生物多様性の大切さに気づき、行動することと記されています。目標達成のためには、普及啓発や教育が重要な役割を果たすということでもあります。私たちもその一端を担うべく、世界中のデジタルプラネタリウムで上映できる大型映像作品「いきものがたり」を完成させました。美しい映像に加え、語りはミュージシャンのUAさん、音楽はDeep Forestが担当するなど魅力満載の作品です。大型映像ならではの、迫力ある映像体験をぜひ。原作本の『いきものがたり』もどうぞよろしく！上映情報はHPをご覧ください。（上田壮一）
http://www.thinktheearth.net/jp/planetarium/

2010年10月から名古屋港水族館で上映がスタート。11月からは甲府の山梨県立科学館などで上映中。

02 毎日の暮らしの中で、自然の移ろいを感じてみませんか

植物や動物、空や大地の移ろいから季節を感じることのできる「えこよみカレンダー」が完成しました。馴染み深い「立春」「立冬」など二十四節気をさらに3分割した七十二候を、人気書家の華雪さんが書き下ろした和の暦です。2011年版は月の満ち欠けや旧暦・雑暦も追加。めぐる季節を日常の中で一層強く感じていただけるはずです。私と「えこよみ」の関係はメールニュース担当時から。約150字で自分流の解説をつけるため、「えこよみ」の表現と身の回りの自然を日々、比較・観察していました。実際の自然がぴったり合う時の驚き、四季の移り変わりに気づかされる楽しさ。つい誰かに話したくなります。都会に暮らしながら自然の姿に敏感になるカレンダー、2011年にぜひ。（金子＝バースリー朝香）
http://www.ThinktheEarth.net/jp/ecoyomi/calender.html


七十二候にあわせて5日ごとにめくるカレンダーです。

03 携帯サイトから社会貢献できる、寄付キャンペーン

宮城県蕪栗沼保全の寄付キャンペーンで配信したケータイアレンジ

皆さんが最後に寄付をしたのはいつですか？1年以上前だったり「寄付にはちょっと抵抗がある」という方もいるはず。でも携帯電話から寄付できると知ったらどうでしょう。携帯サイト「live earth」au版では、売上げの一部を社会貢献活動に寄付し続けています。過去5年間でのべ700万円程。2010年からは日本の各地域に根ざした活動を応援する寄付キャンペーンも始めました。10月末まで宮城県の蕪栗沼保全活動を対象に、マガンの着せ替えツール「ケータイアレンジ」を販売。活動団体の紹介や生物多様性についてのコラムも掲載しました。次なる舞台は北海道。2011年最初の寄付は、携帯サイトからどうぞ。（風間美穂）
※過去の「ケータイアレンジ」は継続配信中。寄付キャンペーンは現在au限定、live earthは3キャリアで展開。　http://liveearth.thinktheearth.net/

04 みずを通じて地球を考える学びの場、「みずのがっこう」は2011年へ

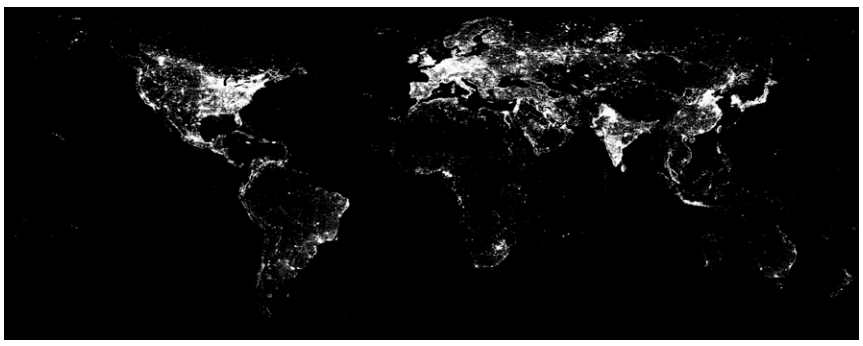
私たちが住んでいる日本では雪解け水や湧き水、川や湖など自然の中でも街の中でもたくさん水を見つけることができます。でも、水の惑星“地球”を全体でみると水はどのような存在なのか。水をとりまく問題として、世界ではいま何が起こっているのか。――地球をキャンパスに、様々なベントを「授業」として実施した2010年度の「みずのがっこう」。7月から10月末まで、全13授業を通して1000人を超える方々が参加しました。終了した授業についてはHPでレポートも公開、リアルな授業に参加できなかった人でもオンライン上で楽しむことができます。写真のワークショップでは、東京を飛び出し、京都市と宮城県仙台市でも授業を実施！ 2011年度の「みずのがっこう」が始まるまでに、予習してみるのはいかがでしょう。（曽我直子）
http://www.ThinktheEarth.net/jp/waterplanet/

水紋画のワークショップ。子どもたちの眼差しは真剣そのもの。

写真ワークショップ「仙台・広瀬川のみずのある風景を撮ろう」。

表紙の地球：Earth at Night／夜の地球

アメリカ空軍が運用する軍事気象衛星（DMSP）によって撮影された膨大なデータから、雲のない「夜の地球」を抜き出して合成した画像です。衛星には地上の微弱な光を捉えるOLSセンサー（高感度近赤外センサー）が搭載されています。DMSP（Defense Meteorological Satellite Program）は、高さ830kmの極軌道から地球を観測することを目的に1960年代から始まったプロジェクト。常に2機の衛星が軌道上にあり、それぞれ101分で地球を一周し、同じ場所を1日に2回観測することができます。この画像は2009年に生成されたもので、毎年アップデートされています。夜の光は文明の象徴とも言えます。どのような地形に文明が発達するかという視点で眺めてみても面白いかもしれません。人口が90億人を超え、さらに文明化が進んだ2050年には、宇宙から見た地上の光景はどうなっているでしょうか。


「夜の地球」の最新データは、アメリカ海洋大気圏局（NOAA）のホームページからダウンロードできます。
http://www.ngdc.noaa.gov/dmsp/

2010年度パートナー企業
（2010.12.01現在　五十音順）

e-天気.net／株式会社NTTデータ／KDDI株式会社／サラヤ株式会社
シャープ株式会社／セイコーインスツル株式会社／ソニー株式会社
株式会社堀場製作所／三井不動産株式会社／株式会社ユニクロ

Think the Earth
www.ThinktheEarth.net/jp

Think the Earthプロジェクトは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO（非営利団体）です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。

環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

NTT DATA　変える力を、ともに生み出す。
NTT DATAグループ

本誌、および「地球リポート」と「地球ニュース」は株式会社NTTデータのご協力により制作しています。世界各地でいま注目の人や活動を取材する「地球リポート」（年6回）や国内外のリポーターから届く［地球ニュース］はwww.ThinktheEarth.net/jp内の［Think Daily］でも好評掲載中です。

PRINTED WITH SOYINK
GREEN PRINTING JFPI
P-B10002
発行●Think the Earthプロジェクト
〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町3-1 エムワイ代官山201
TEL 03-3464-5221　FAX 03-5459-2194
E-mail tte-office@ThinktheEarth.net
発行日●2010年12月
STAFF●企画／上田壮一　編集／岡野 民　制作／曽我直子
デザイン・イラスト／武田英志（hooop）
協力／長谷部智美　金子＝バースリー朝香

地球検定 mini

知ってるはずの基礎問題から環境キーワードまで、
全10問であなたのThink the Earth度をチェック。

1 世界で初めて宇宙に行った飛行士は？
Ⓐユーリイ・ガガーリン　Ⓑエリソン・オニヅカ
Ⓒニール・アームストロング

2 ごくまれに、1ヶ月に2回満月が見られることがあります。この2回目の満月のことをなんと呼ぶ？
Ⓐブルームーン　Ⓑダブルムーン
Ⓒハッピームーン

3 持続可能エネルギーとしてユニークな発電方法が次々と研究されています。次のうち、存在しないのは？
Ⓐ波力発電　Ⓑ音力発電　Ⓒ香力発電

4 家庭の電力消費量で、一番高い割合を占めるのは？
Ⓐエアコン　Ⓑ冷蔵庫　Ⓒ衣類乾燥機

5 家庭の中で、一番水を使うのは？
Ⓐ炊事　Ⓑお風呂　Ⓒトイレ

6 世界には6千～7千の言語があると言われています。母語として話す人の数が一番多いのは中国語。次いでスペイン語、英語が続きます。その次に多いのは？
Ⓐロシア語　Ⓑアラビア語　Ⓒヒンドゥ語

7 輸入食料を運ぶ距離と使うエネルギーについて知る指標は何と言う？
Ⓐフードエネルギー　Ⓑフードマイレージ
Ⓒフードアクション

8 多くの人の寄付などで土地を買いとり、自然環境を保全していく市民運動の名前は？
Ⓐナショナル・トラスト運動
Ⓑナショナル・セービング運動
Ⓒナショナル・キーピング運動

9 絶滅危惧種に指定されている動物が最も多い国、エクアドル。いったい何種、指定されいるでしょうか。
Ⓐ約200種　Ⓑ約2,000種　Ⓒ約20,000種

10 生物多様性条約って、いつ作られた？
Ⓐ1972年　Ⓑ1992年　Ⓒ2002年

A1 Ⓐユーリイ・ガガーリン
ロシアの宇宙飛行士ガガーリンは1961年4月12日、27歳の時に世界で初めて宇宙から地球を見ました。2011年は人類が宇宙に行ってからちょうど50年目になります。

A2 Ⓐブルームーン
月の満ち欠けの周期は約29.5日であるため、月初に満月が巡ってくると、再び月末に満月となります。このため「ブルームーン」は非常に珍しいことの例えとして使われることも。

A3 Ⓒ香力発電
香りを使った発電はまだ存在しませんが、波の力を使った発電と音や振動を利用した発電は既に開発済み。

A4 Ⓐエアコン
日本の家庭では電気の25%がエアコンに使われています。冷蔵庫は16.1%、衣類乾燥機は2.8%。

A5 Ⓒトイレ
東京都水道局の調べによるとトイレは全体の使用量のうち28%。水洗トイレなどの普及によって、1人が1日で使う平均の水の量は1965年から2000年までの間で約2倍に増えています。

A6 Ⓑアラビア語
中東を中心に話されているアラビア語を母国語にしている人は約2.2億人。ヒンドゥ語は約1.8億人、ロシア語1.4億人。ちなみに1位の中国語は約12億人。

A7 Ⓑフードマイレージ
輸入する食料の重さと運ぶ距離を掛け合わせて計算。この数字が少ないほどCO_2の排出がおさえられます。

A8 Ⓐナショナル・トラスト運動
19世紀、産業革命の中で失われつつある自然を守ろうとイギリスではじまった草の根運動。現在は日本でも全国各地で行われています。

A9 Ⓑ約2,000種
国際自然保護連合が発行した「レッドリスト2010.1版」に掲載されたエクアドルの絶滅危惧種は2,211種。ガラパゴス諸島をはじめ自然豊かな同国には35,000種にも及ぶ植物種が存在していると言われていますが、人間による活動が原因で、多くの生物種が急速に絶滅、もしくはその危機に追いやられています。

A10 Ⓑ1992年
現在は190ヶ国と欧州共同体（EC）が締結しており、日本も1993年に締結。米国は未締結です。

判定！▶▶▶▶▶
0～3問＝落第！
4～7問＝合格
8～10問＝博士級

「かえる力（りょく）」で、こころざす。

成長したり、ちょっと立ち止まったり。
ときには少し下がって、助走をつけてみたりもする。
変わっていく自分を好きになると、
変化そのものも好きになれる。
そうすればきっと、進むべき道は、
おのずと見えてくるはず。

―― NTTデータは、今日もITで企業の変革をお手伝いしています。

〈お問合せ先〉株式会社NTTデータ 広報部
〒135-6033 東京都江東区豊洲3-3-3 豊洲センタービル http://www.nttdata.co.jp/

変える力を、ともに生み出す。
NTT DATAグループ